

戦争を知らない世代へ ②⑦ 広島編

広島の願い

—高校生と被爆三十一年—

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ②

広島の願い——高校生と被爆31年

昭和51年11月 3 日 初版第 1 刷発行

編者◎ 創価学会青年部反戦出版委員会

発行者 栗生一郎

発行所 株式会社 第三文明社

郵便番号 101 東京都千代田区猿樂町2-5-4

振替 東京5—117823 電話 03(294)8731(代)

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 星共社

落丁・乱丁本はお取り換え致します 0036—7027—4438

發刊の辭

平和と平和の間に戦争が勃発するのか、それとも戦争と戦争の間に平和が訪れるのか——。残念ながら、歴史が示す限りでは、平和は戦争と戦争の間の一時的平穩状態にすぎなかった。

そして二十一世紀四半世紀——この時代の最大の特質は、人類が核兵器によって滅び去る危険性のなかで生きているということである。この時代、人類はこの地球を、巨大な「火薬庫」とし、「死の惑星」と化し、人類史の最終章を自ら書き終える「核」を手に行っている。平和を求め、願う人びとの生命の叫びにもかかわらず、核戦争の脅威は「ダモクレスの核の剣」のように、私たちの頭上にかぶさっている。このような現実に対して、地球上から核兵器を頂点とする武器を一掃すること、戦争を根絶すること——これこそ二十世紀後半から二十一世紀に生きる私たちに与えられた最重要課題であろう。

戦争体験は、時の経過とともに次第に風化していく。広島においても、街並みの近代化とともにそれが顕著である。戦争の悲惨さ、残酷さを後世に伝えていくことは、戦争体験を風化させないことと同時に今日の重要課題である。

広島高等部では、こうした現実認識のうえから、昨春に反戦文集の第一集「生命の叫び」を編さんした。このうちから五十六編を選んで八月に「私が聞いたヒロシマ―高校生が訴える平和への叫び」として発刊した。高校生の手になる全国で初めての反戦出版であった。このことがはずみとなって、県下の高等部員のあいだに、戦争体験を継承する運動が広範に沸き起こった。そしてごく自然な形で「生命の叫び」第二集の編集に着手したのである。まったく自発の行動であった。私も、彼らの輪の中に入って、ともに語り、ともに励まし合い、多くことを学ぶことができたと思っている。

県下全域にわたって寄せられた三百五十余編の文集は、どの一編も、涙なくして読み進むことはできなかった。この一編を、より多くの人に一読してもらいたいとの思いが、今回実を結び、出版される運びとなったことは喜びにたえない。願わくば一人でも多くの人に読んでいただき、広島熱き思いに心をはせていただければと念ずるのみである。私たちも、この運動を広島高等部の活動の一環と位置づけ、広島島の地より、平和世界の創出に戦い抜く決意である。

昭和五十一年九月八日

創価学会青年部

広島県高等部長 寄田 潔

目次

発刊の辞

ビカドンは死ぬまで忘れない	田中孝子	11
悪魔の力	延藤 靖	16
原爆は無用の長物	金田陽子	21
広島のいちばん長い日	尾本庄司 角 正明 向井清治 砂川 弘	26
八月七日の遺体収容	迫田絹代	36
原爆は戦争の象徴	帆足順子	40
一瞬にして白骨に	佐藤秀保	46
横浜からやってきた広島は	相沢良子	50

戦争の影……………	須沢久美子	54
あれは生き地獄じゃった……………	富士田正明	58
母の体験談に思う……………	広田由美子	60
高熱に背中が燃えて……………	池上弘三	63
原爆は人間の心を奪う……………	横山富士雄	66
わずか数秒が無間地獄に……………	垣下智恵美	69
死者の川……………	渡部昭雄	71
暗く、眠れぬ一日……………	中谷賢二	74
まるで材木のように……………	拝志 栄	77
みんな死んだ……………	織田 武	78
ひき裂かれた夢……………	合田恭子	79
かわいそうな母……………	藤川正明	83
夫は二日後に死んだ……………	浦田裕幸	86
戦争の傷痕……………	杉原 環	88
母から知った広島素顔……………	山村弘子	91
やっと話してくれた父……………	貞森良子	93

マグネシウムの光線が……	中島康子
被爆した倉本先生……	井原利彦
死の灰は三十キロも飛んだ……	藤賀ひとみ
ある日突然の原爆症……	兼好こずえ
あの戦争は今も終わらない……	中野澄江
あの日に消えた母の妹……	吉田伊公子
五日市の軍需工場にて……	寺川京子
戦争を十代で知った父と母……	天野和子
宮島から目撃して……	谷川裕子
古い思い出であってほしい……	百々まゆみ
死んでも忘れられない……	高木美奈子
祖母の体験に遺言を思う……	景山美喜子
たった一発が……	宇田瑞恵
十余年後の原爆症……	岩本秀美
宇品の司令部にいた母……	村戸良至
これぞ生き地獄……	川本千鶴

人間がバーベキューにされた日	新保智恵
先生の証言	平賀真由美
悲鳴とウジ虫の広島	岡本順子
全身ヤケドで死んだ祖父	玉元 宏
死者の流れる太田川	小川 康文
腹は裂け胎児も死んだ	田村 充子
決して言いつくせはしない	斎藤勝彦
またに無間地獄	柏村初恵
たれさがった皮膚	迫越公子
手足のもげた子供たち	高富哲也
あの日三人の先生は	田城隆子
断末魔の被服廠	田中久美子
比治山の眠れぬ一夜	高阪智子
ある親子	野村裕一
私のヒロシマ	河野玲子
身も心も疲れて	村上雅俊

気が狂うのも忘れて逃げた.....	吉田直美	178
心にうけた原爆.....	菅 純利	181
三人の証言.....	岩根里美	184
顔はふくれ、手の皮はたれて.....	朝倉清行	187
両親の幼い体験.....	丸本亮美	189
原爆に消えた青春.....	松岡恭子	192
母の願い.....	福本和恵	195
アメリカを恨んで死んだ伯父.....	大鴻小百合	198
死んでも生きて悲惨のひとつ.....	甲斐哲男	200
地獄なんてものではない.....	森木好宣	203
数日後の福塩線.....	村田桂三	205

あとがき

広島の願い

——高校生と被爆三十二年——

ピカドンは死ぬまで忘れない

田中孝子（県立広島商業高校）

私は七歳の時に静岡から広島に引越してきて十一年になります。だから、親類の人たちが被爆したことは聞いたことがあります。被爆体験の取材にはだれにうかがえばよいやらほとほと困ってしまいました。そんなとき、奥滝のおばさんが「うちのおじいさんは、だいぶボケとるが、原爆のことは三十年も昔のことじゃけどよう覚えとるよ。それだけ強烈じゃったんよね」と言っているのを耳にしたのです。さっそくおじいさんに頼んだところ、「毎日まっとるけ。いつでも時間のいいときおいでえや」とのこと。おじいさんは一言一言かみしめるように話してくれました。

広島の願い

当時は観音町に住んで、東洋工業に勤めていたそうです。子供が四人いて、上の男の子は祇園の中学、上の女の子は観音小学校、そして下の子供たちは三つと五つでした。また、奥さんは妊娠九カ月という身重だったとのこと。あの八月六日も、どこことって変わったことはなく自転車で家を出ました。自転車故障し押しながらで、東洋工業へは遅刻でした。やっとこさ会社の

門を入った……と思ったその時、何かが光った。「オヤ、照明弾かな」と上をむいたとたん、だいたい色のような、とにかくものすごい光が走ったのです。そして爆風。吹きとばされ、横転してしまいました。幸い、すぐ近くに防空壕があり、ころげ入って九死に一生を得ました。

あたりが静まったところ、そろそろ出てみると、工場から人が大ぜい血だらけになって逃げだしているではありませんか。工場の屋根のスレートが落ち、ガラスというガラスは砕かれ、その破片でケガをしていたのです。工場の中へは入るに入れず、皆が逃げていくので奥滝のおじいさんは理由もわからないまま、とにかくあとから逃げました。自転車の故障がもとで工場にいなかったおじいさんは腕をすこし切っただけ、皆の傷よりずっと浅かったのです。

避難の道すがら会う人のだれもがひどいケガでした。髪をボサボサにふり乱し、ボロボロになった着物をまとい、焼けただれてズルズルの皮膚をぶら下げたまま、どの人もどの人も逃げていたそうです。防火用水に体をつっこんで死んだ人がいるかと思えば、焼けただれた体からは走る気力もなくなったのか、両手をだらんとたらしただまま本当の幽霊みたいな人もいたと、その姿を身ぶり手ぶりで私に教えてくれました。付近の山々は高熱に山火事をおこし、どこを見ても炎、また炎でした。家へ帰るにも橋はみんな焼け落ち、渡れません。おじいさんは白島をまわって帰ったそうです。

さんざんな思いでやっと観音の家にたどりついたのに、家はくずれ落ち焼けていました。奥さ

私たちの姿ありません。まえまえから避難場所としておいた廿日市はつかいちの地御前へ逃げたのかもしれない。捜しながら己斐こいの土手にさしかかると近所の人に会い、「あんたの奥さんは廿日市に行かれました。あそこへ行ってみんさいやの」と、その無事が確認されました。しかし、己斐からそこまでは長い道のりです。悲惨な死の世界をくぐってきた五体は綿のように疲れきっていました。乗り物などはもちろんありません。軍隊のトラックだけは走っていますが、重傷の人たちでいっぱいでした。

おじいさんは、かすかな力をふりしほり歩きました。避難場所である廿日市の小学校にたどりついたとき、八月六日の太陽はすっかり沈んでいました。小学校のなかは真っ暗で何も見えず、奥さんの名前を呼んでみても、何の返事也没有ません。そこは、この世でなくなっていました。「水をくれろ」「熱いよーッ」原爆の苦しみが小学校の暗闇にどよめいていたのです。まさしく原爆の縮図とでもいふべき暗闇におじいさんは疲れきった体をよこたえ、朝になるのを待ちました。

八月七日の朝がきて、小学校の多くの人たちは冷たくなっていました。亡くなった人たちも苦しければ、おじいさんにも苦しいそれは光景でした。でも、おじいさんの心は明るくなりました。奥さんたちと、小学生の光子ちゃんには生きて会えたからです。奥さんは原爆が落ちたとき、その爆風で家の屋根が落ちて下敷きになりました。自力で屋根下から這いだしたときに五寸クギが

足の裏に突きぬけ、これも自分で引きぬいて子供たちを連れて廿日市まで逃げてきたのです。子供たちも太ももにヤケドをうけ、ノドの渇きと痛みとで苦しみ泣いていました。

その後、おじいさん一家は田舎へ帰りました。田舎では原爆を“ビカドン”といってましたが、それが本当はどういう爆弾であるかだれも知らずにおりました。“原爆”という言葉を知ったのはずっとあとのことだそうです。そのころから光子ちゃんの容態は悪化しました。夏のことだから顔のヤケドが化膿してウミがでます。そこにウジもわきました。やがて体中が紫の斑点になりました。「こりゃあたひへんじゃ」と医者の方をたたいたのです。しかし、それが原爆症とわかる当時ではありません。「長くないけ、大事にしてあげんさい」と、原因もわからぬままサジを投げられました。医者まで二里の道のりを往復ともずっとおじいさんがおぶったそうです。その帰り、坂道を上っているときです。苦しがつている幼い光子ちゃんがおじいさんに、「お父ちゃん、やねこい（重たい）だろうが。うち、歩いていくけ……」と背中から降りようとしたのだそうです。こんな優しい子がもう長くないと思うと、不憫で不憫でならなかった——と、おじいさんは今にも泣きださんばかりに言っていました。

家に帰ると光子ちゃんは仏壇にむかうと言いだしました。まだ十歳にもならない子供心に自分の死を直感していたのでしょうか。仏壇に小さな手を、紫の斑点の浮かんだ小さな手を、合掌し